

# ジョージ・エリオットの〈グランド・ツアー〉

—「イタリアの思い出」考察<sup>1</sup>

George Eliot's "grand tour": "Recollections of Italy. 1860"

田村 真奈美

## 概要

19世紀英国において、ヨーロッパ大陸への旅はアッパー・クラスのみならず、経済的に余裕のあるミドル・クラスの人々にも可能なものとなってきていた。旅が大衆化するにつれて、その性質も変わってくる。また、数多くの旅行記やガイドブックが刊行され、人々の旅への思いは一層掻き立てられた。本発表ではそのような背景の中にジョージ・エリオットの「イタリアの思い出」("Recollections of Italy. 1860")を置き、彼女のイタリア旅行の特質を浮かび上がらせようと試みる。「イタリアの思い出」は出版を目指したのではなく旅の短い記録であるため、他の旅行記との比較は難しいところもあるが、先行する旅行記やガイドブックの影響が感じられる部分もある。また、ほぼ同時代の作家の旅行記と比べると、作家としての特質の違いが明確になる。本稿で取り上げた旅行記の中で最もエリオットの旅の姿勢に近いのは、おそらく『イタリア紀行』に見られるゲーテの旅の姿勢ではないだろうか。ゲーテにとってイタリアは再生の地となったが、エリオットにとってもこのイタリアの旅は新たな生の始まりを告げるものと捉えられるのである。

## I. はじめに

英国人にとってイタリアは長きに渡り特別な興味の対象であった。古代ローマの歴史や、中世・ルネサンス期の文学、絵画を学ぶことは、アッパー・クラスの人々にとっては教養と見なされていた。18世紀に盛んであったグランド・ツアーはアッパー・クラスの若者の教育の総仕上げといった意味を持っていたが、主たる行き先の一つがイタリアであった。19世紀になるとヨーロッパ大陸への旅はアッパー・クラスのみならず、経済的に余裕のあるミドル・クラスの人々にも可能なものとなってきていた。ジョージ・エリオット (George Eliot)<sup>2</sup>もフランス、ドイツ、イタリアなどを数度訪問している。本稿で取り

<sup>1</sup> 本稿は日本ジョージ・エリオット協会第23回全国大会(2019年12月14日)のシンポジウム「ジョージ・エリオットと旅——“Recollections”を読む」における発表原稿に加筆・修正したものである。

<sup>2</sup> ジョージ・エリオットは筆名で、本名はMary Anne Evans(1819-80)。なお本名の表記にはいくつかのヴァリエーションがあるが、本稿では英国のThe George Eliot Fellowshipで用いられている綴りを採用した。

上げる「イタリアの思い出」はエリオットにとっては二度目のイタリア旅行の記録である。<sup>3</sup>

エリオットがイタリアへ旅立つ頃には、旅行記やガイドブックが巷に溢れていた。本稿では、エリオットも読んでいたと思われるゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) の『イタリア紀行』 (*Italienische Reise*, 1816-29),<sup>4</sup> 19世紀前半の英国でイタリア旅行への関心を高めるのに一役買ったサミュエル・ロジャーズ (Samuel Rogers, 1763-1855) の詩集『イタリア』 (*Italy*, 1822),<sup>5</sup> ヴィクトリア朝のイタリア旅行記としてフランシス・トロロープ (Frances Trollope, 1779-1863) による『イタリア訪問記』 (*A Visit to Italy*, 1842) とチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の『イタリア紀行』 (*Pictures from Italy*, 1846), そして19世紀には英国人旅行者必携のガイドブックであったマレー (Murray) 社の『旅行者ハンドブック』 (*Handbook for Travellers*) のシリーズを背景にしてエリオットの「イタリアの思い出」を読むことで、エリオットのイタリア旅行の特質を浮かび上がらせたい。

“We have finished our journey to Italy” (336) ということばで始まる「イタリアの思い出」は、イタリアへの旅が終わってから書かれている。旅行中はメモを取るだけで日記をつけていなかったため、帰国後そのメモを参考に印象に残っていることを記したものがこの旅行記である。その短さからもわかるように、旅全体を詳述しているわけではなく、記録する内容はかなり絞られている。多くは訪れた場所で見えた建築や絵画、そして自然の風景についての記述であり、イタリアの社会や宗教についての考察はない。また、現地の人々や他の旅行者との交流の記述もほとんど見られない。エリオットは旅の途中、友人たちに手紙を書き送っており、また同行したルイス (G. H. Lewes, 1817-78) は日記をつけていたが、そこには「イタリアの思い出」には書かれていないことも散見される。これらの書簡や日記も参照しながら、旅程、旅の目的、記述の特徴、他の文献との比較の順で「イタリアの思い出」を検証してゆく。

## II. 旅程

1860年3月24日、エリオットはパートナーのルイスとともにイングランドを発ち、フランス経由でイタリアへ向かった。「イタリアの思い出」は、フランスとイタリアの境にあるモン・スニ峠を真夜中に越えるところから始まる。

The first striking moment in our journey was when we arrived, I think about eleven o'clock at night, at the point in the ascent of the Mont Cenis where we were to quit the diligences and take to the sledges. After a hasty drink of hot coffee in the roadside inn, our large party—the inmates of three diligences—turned out into the starlight to await the signal for getting into the sledges.

<sup>3</sup> エリオットにとっての初めてのイタリア訪問は1849年、ブレイ (Bray) 夫妻に同伴しての旅で、フランス、イタリア (ジェノヴァ、ミラノ)、スイスを訪れている (Haight, *Biography* 70)。

<sup>4</sup> 実際にゲーテがイタリアを旅したのは出版よりかなり前の1786～88年のことである。

<sup>5</sup> 『イタリア』は改訂され何度も出版されたが、最も売れた1830年版にはターナー (J. M. W. Turner, 1775-1851) による銅版画の挿絵が入っていた。

That signal seemed to be considerably on in the future, to be arrived at through much confusion of luggage-lifting, voices, and leading about of mules. The human bustle and confusion made a poetic contrast with the sublime stillness of the starlit heavens spread over the snowy tableland and surrounding heights. The keenness of the air contributed strongly to the sense of novelty: we had left our everyday conventional world quite behind us and were on a visit to Nature in her private home. (336)

モン・スニで乗合馬車 (diligence) から櫓に乗り換え、「日常の平凡な世界からすっかり隔絶されて、大自然の本拠地たる秘境を訪れようとしていた」とある。星空と雪原、乗り換えの騒ぎと周囲の静けさの対照が印象的な、旅の始まりである。当時、陸路でイタリアに向かうためにはアルプスを越えなければならず、このアルプス越えが旅の最初の難所だった。「イタリアの思い出」では、上の引用に続いて、風吹き荒ぶ真夜中に櫓で峠を越える様子が描かれるが、旅の不自由さや困難よりもその状況の非日常性が強調され、まるでアルプスを越えて別世界へ入って行くかのようなようである。実際、エリオットはこの難所を予想よりも楽に乗り越えたのだが、ルイスはそうではなかったようだ。そのことが旅の喜びを幾分妨げた、とエリオットは出版者ジョン・ブラックウッド (John Blackwood, 1818-79)宛の手紙の中で語っている (*Letters* 3: 285)。

モン・スニ峠からイタリアへ入るコースは18世紀のグランド・ツアーの時代から最も一般的なものであった、とジェレミー・ブラック (Jeremy Black) は『英国人とグランド・ツアー』(*The British and the Grand Tour*, 1985)の中で述べている(20)。そして、イタリアではローマ、ヴェネツィア、フィレンツェ、ナポリが英国人に人気の都市であった(5-6)。エリオットとルイスもこの4都市を訪れているが、彼らの旅は3か月と当時の基準ではそれほど長くなかったため、当初はローマ止まりでナポリを訪れる予定はなかったようだ。結局ナポリまで足を伸ばし、その結果、旅の期間も延びることになるなど、エリオットとルイスの旅の計画はそれほど厳密なものではなかった。二人は旅の途上で書籍を購入しているが、その中には当時多くの旅行者が携行していたマレーの南イタリアのガイドブック (*A Handbook for Travellers in Southern Italy*, 3rd edition, 1858)も含まれていたという (Harris 328)。急遽訪れることにしたナポリおよびその周辺について調べるために購入したものと考えられる。

ここでマレーのガイドブックについて少し説明したい。ヴィクトリア朝の旅行記において必ず登場するのがマレーのガイドブックである。ジョン・マレー (John Murray, 1803-92) が執筆し、1836年に出版された『ヨーロッパ大陸への旅行者ハンドブック』(*A Hand-book for Travellers on the Continent*) は個人的な旅行記とは異なり、旅に必要とされる正確な情報を記載し、旅行者の便宜を考慮した現代のガイドブックの先駆けであった。一方で、ジョン・マレー個人が書いたことを売り物にもしており、古今の名著からの引用も豊富で、見るべきものも彼個人が選んでいる (Buzard 65-67)。

携行に便利のようにコンパクトなサイズで出版されたマレーのハンドブック・シリーズは旅行者必携のガイドブックとなり、ついには旅先でマレーに書かれたとおりがどうか確かめることが旅の目的と

なった旅行者も出るほどであった (Buzard 76). このハンドブック・シリーズの特徴として、各地の歴史を紹介する他に文学的な逸話を紹介することにも熱心であったことが挙げられる。たとえば、ローマのコロセウムの項ではバイロン (George Gordon Byron, 1788-1824) の『マンフレッド』 (*Manfred*, 1817) からの一節が紹介されている。そのために月明かりの下でコロセウムを訪れることが英米の旅行者の間で大流行したという (Schaff 115)。さらに旅程に関しては、このガイドブックには各都市を回るモデルコースが幾とおりも紹介されており、どのような交通機関を使うかなど各旅行者の好み、また時間と経済的余裕によって計画を立てられるようになっていた。

エリオットの旅程を詳しく見てみよう。すでに述べたように、エリオットは1860年3月24日に英国を発ち、フランスを経由してモン・スニ峠からイタリアへ入った。その後トリノ、ジェノヴァ、リヴォルノ、ピサ、チヴィタ・ヴェッキア、ローマ、ナポリ、ポンペイ、サレルノ、パエストウム、アマルフィ、ソレント、フィレンツェ、ボローニャ、パドヴァ、ヴェネツィア、ヴェローナ、ミラノ、コモなどを訪れ、シュプリューゲン峠を通過してスイスへ抜け、1860年7月1日に帰宅した。訪れた町の中には滞在時間が数時間という町 (トリノ、ピサ、パドヴァなど) もあれば、1週間以上滞在した町もある。ローマには1か月、ナポリとフィレンツェには2週間ずつ、ヴェネツィアには1週間滞在した。滞在期間を長く取った町は、グランド・ツアーの時代から英国人旅行者が必ずといっていいほど訪れた町である。なお、当時はたいいていの旅行者が、復活祭あるいはクリスマスの時期にローマを訪れるよう旅の計画を立てていた。エリオットは復活祭の時期にローマを訪れている。<sup>6</sup> なお、彼女は3月末に出発して6月末に帰国したため本格的に暑くなる時期のイタリアには滞在していないが、夏の間、英国人旅行者はイタリア北部にとどまるようガイドブックでは注意されていた。暑さだけでなく、蚊が媒介するマラリアが恐れられていたためである。

交通機関については馬車だけでなく鉄道を多用しているところが、1860年という時代の旅の特徴であろう。鉄道を利用したことがわかっている区間は、モン・スニ峠を越えてすぐの町スーザからトリノを経由してジェノヴァまで、リヴォルノ・ピサ間の往復、チヴィタ・ヴェッキアからローマ、リヴォルノからフィレンツェ、パドヴァからヴェネツィアである。蒸気船で海を渡って移動したところもあるが、船旅はどれも苦手だったようである (“Recollections” 354)。

ところで、イタリアへ入るには難所アルプスを避けて、海路で入国することもできた。ディケンズはマルセイユから船でジェノヴァに到着している。ディケンズの場合は家族でジェノヴァに1年間滞在しながら、イタリア各地へ旅行に出かけるというスタイルだったため、人数も荷物も多かったからかもしれない。ただし、ディケンズも帰路はアルプスを越えている。

---

<sup>6</sup> 1860年のイースター・サンデーは4月8日。

### Ⅲ. 旅の目的

エリオットがイタリア旅行に出発したのは『フロス河畔の水車場』(*The Mill on the Floss*, 1860) 脱稿直後のことであった。ローマからジョン・ブラックウッドへ送った手紙には次のように書かれている。

I think Rome will at last chase away Maggie and the Mill from my thoughts: I hope it will, for she and her sorrows have clung to me painfully. (*Letters* 3: 285)

エリオットの旅の目的の一つは、自伝的要素を含み、過去の辛い記憶と向き合わなければならなかった小説の執筆の後で、心身の健康を取り戻すということであったようだ。エリオットだけでなく、ルイスも健康状態を損ねていた。「イタリアの思い出」に自然を楽しむ描写が多いのは、このような背景があったからであろう。特に2週間滞在したナポリでは、見るものの多かったローマの後に訪れたこともあり、南イタリアの気候と美しい海の風景をただ満喫していた。一方で、旅先の社交が描かれることはほとんどない。実際、二人は町の中でも静かなところに宿を取り、ガイドブック片手に歩き回る旅行者を避けていたことが書簡からわかる。たとえば、英米人滞在者の多いフィレンツェからジョン・ブラックウッドに送った手紙には次のように書かれている。

We are at the quietest hotel in Florence, having sought it out for the sake of getting clear of the stream of English and Americans in which one finds oneself in all the main tracks of travel, so that one seems at last to be in a perpetual noisy pic-nic, obliged to be civil though with a strong inclination to be sullen. My philanthropy rises several degrees as soon as we are alone. Mr. Lewes is more sociable than I am, but finds travelling society rather too strongly American in its flavour to be quite desirable, and so we concur in the disposition to know nobody. (*Letters* 3: 294-5)

静かなホテルを選び、特に英米人観光客に会わないよう、付き合わなくても済むようにしているというのである。「イタリアの思い出」に社交の記載がほとんどないのは、エリオットとルイスの旅が、人付き合いに煩わされることなく静かに過ごしたいというものだったからなのである。

上の手紙からもわかるように、19世紀のイタリアには英国人旅行者や滞在者が多く、彼らとの付き合いを避けるのは容易ではなかったようだ。社交家のフランシス・トロロープはイタリアで出会った英国人との付き合いだけでは飽き足らず、イタリア人とも積極的に知り合おうとしていたことがその旅行記からわかる。その旅行記は友人への手紙という形で書かれており、ゴシップ好きでしかも有名人好きという特徴がある。彼女はローマ教皇にも謁見しており、その様子は少し自慢げに書かれている(2: 334)。他人への興味がトロロープの旅行記最大の特徴ではないだろうか。

ところで、エリオットとルイスはただ南国の自然を楽しんで、のんびりとすごしていたわけではない。エリオットは「イタリアの思い出」冒頭に次のように記している。

We have finished our journey to Italy—the journey I had looked forward to for years, rather with the hope of the new elements it would bring to my culture than with the hope of immediate pleasure. Travelling can hardly be without a continual current of disappointment if the main object is not the enlargement of one's general life, so as to make even weariness and annoyances enter into the sum of benefit. (336)

彼女の旅のもう一つの目的は教養を深めることであり、特にイタリア芸術に直に触れることを楽しみにしていた。一方で、エリオットがイタリアへ旅した時期はイタリア統一運動が高まりを見せていた時期であった。旅先で見聞きした動きについて彼女は書簡では簡単に触れているが、その後こう書き足している。

On a first journey to the greatest centres of art, one must be excused for letting one's public spirit go to sleep a little. (*Letters* 3: 294)

それゆえ、芸術に関する記述が圧倒的に多い「イタリアの思い出」では、統一運動の気配が感じられるのはただ一箇所だけなのである。その一箇所とは、トリノの駅でジェノヴァへ行く汽車を待っていた時のことである。この時、駅で統一運動の中心人物の一人カブール伯爵 (Count Cavour, 1810-61) を見かけたのだった。「イタリアの思い出」に見られるエリオットのカブール評は好意的である。

A man pleasant to look upon; with a smile half kind half caustic; giving you altogether the impression that he thinks of “many matters,” but thanks heaven and makes no boast of them. (337)

さらに、ローマから友人に送った手紙にもカブールについての好意的な描写が見出され (*Letters* 3: 287)、統一運動へのエリオットの共感が見て取れる。このようにエリオットは統一運動に無関心であったわけではないのだが、このイタリア旅行における彼女の最大の関心事は、イタリアの政治情勢ではなく、芸術探訪であった。

#### IV. 旅の記録

##### 1. 記述の特徴

19世紀には多くの旅行記が英国における知人への手紙という形式で書かれていた。実際に旅先から出した手紙を再構成して加筆し、出版されたものもある。ディケンズは『イタリア紀行』の冒頭に次のように書いている。

Many books have been written upon Italy, affording many means of studying the history of that interesting country, and the innumerable associations entwined about it. I make but little reference to that stock of information.... The greater part of the descriptions were [*sic.*] written on the spot, and sent home, from time to time, in private letters. I do not mention the circumstance as an excuse for any defects they may present, for it would be none; but as a guarantee to the Reader that they were at least penned in the fulness of the subject, and with the liveliest impressions of novelty and freshness. (5-6)

上の文章にもあるように、このような場合、記述は旅の途上で、まだ出来事や見たものの記憶が鮮明なうちに書かれるわけで、それを再構成した旅行記にはその臨場感が残っているという利点がある。しかしながら、本稿冒頭で述べたように、エリオットの場合は旅行中のメモを頼りに帰国後に印象を書き綴ったものである。「イタリアの思い出」には、行く先々で見て印象に残った建築や絵画、彫刻の名前が列挙されていることが多いのだが、それもメモを頼りに書いているという執筆方法の影響があるのかもしれない。建築を含む芸術一般へのエリオットの印象は個人的なものではあるが、旅に出る前にかなり予習をしていることが見て取れる。どの場所では何を見たいということがはっきりしており、記述自体にも予習の跡が感じられる。

出版を前提としたイタリア旅行記の場合、芸術作品に対するコメントをどの程度記載するかが著者にとっては問題であったようだ。有名な作品であれば、どうしても美術書、あるいはすでに世に出ている旅行記やガイドブックの後追いになってしまうからである。そもそも、すでに多くの旅行記が書かれているところへ新しいイタリア旅行記を出すこと自体が弁明を必要とした。トロロープもディケンズも、新たな旅行記を出版することへの弁明を旅行記の冒頭に書いているが、両者とも独自色を前面に出して、先行する旅行記との差別化を図っている。

It must be a bold donkey, you will say, who, after this, shall venture to bray about Italy; and a bolder one still, perhaps, who shall venture to differ from one whose judgment ever carries weight with it. But, despite the host of observers who have preceded me, I still feel a longing to gossip a

little about this Italy, partly, perhaps, from my inveterate habit of gossiping about everything, and partly, because I am of opinion that an immense majority of the inferences which have been deduced by trotting travellers from the aspect of the scenes through which they passed, have been exceedingly unsound, however unintentionally so. (Trollope 1: 2)

この引用でも明らかのように、トロロープの旅行記は友人と気のおけない噂話をしているかのような調子が特徴である。また、行く先々ですること、見るものは他の旅行者と特に変わらないものの、そこに添えられるコメントは総じてユニークである。他の旅行記への言及も頻繁に見られ、意識して違いを強調していることがわかる。たとえばジェノヴァでは、宮殿よりもすばらしかったのは病院であるとし、ジェノヴァはその富を誇示する一方で、困窮するものことも忘れていないと称賛している。そして、ある病院にはミケランジェロ (Michelangelo, 1475-1564) による小さいが素晴らしい彫刻があった、と社会的な関心を披露しつつ、他の旅行記には書かれていない細部を付け加えているのである (1: 51-2)。

ディケンズは政治に関しては言及せず、絵画や彫刻についても多くを語らない、と冒頭で読者に断っている (5)。彼の場合は、見たものをそのまま正確に描くというよりも、彼の想像力によって再構成された世界が提示されているように思われる。ときに芝居がかっているように感じられるシーンもあるが、ヴェネツィアの場合のように、過去と現在、夢と現が入り混じった幻想的な描写が、かえってその町の特徴をうまく表現していることもある。

## 2. 先行する旅行記・ガイドブックとの比較

次に、エリオットが実際に訪れた各地の印象の記録を、他の旅人の記録と照らし合わせながら考察する。対象とするのは代表的な観光地のローマ、ナポリ、フィレンツェ、ヴェネツィアと、ナポリから馬車で訪れた遺跡の町パエストウムである。

エリオットのイタリア旅行の最初のハイライトは、やはりローマだった。しかし、到着時の第一印象は良くなかった。望んでいたホテルは満室で、やっと見つけたホテルから散策に出かけたのだが、期待は裏切られるばかりでがっかりしている様子が「イタリアの思い出」の記述からは読み取れる。

...we walked out to look at Rome—not without a rather heavy load of disappointment on our minds from the vision we had had of it from the omnibus windows. A weary length of dirty uninteresting streets had brought us within sight of the dome of St. Peter's which was not impressive, seen in a peeping makeshift manner, just rising above the houses; and the Castle of St. Angelo seemed but a shabby likeness of the engravings. Not one iota had I seen that corresponded with my preconceptions. (341)

ローマについては、みな期待が大きいのか、到着直後にごっかりすることがしばしばあったようだ。ディ

ケンズも思い描いていたローマと違うと記している。

There were no great ruins, no solemn tokens of antiquity, to be seen;—they all lie on the other side of the city. There seemed to be long streets of commonplace shops and houses, such as are to be found in any European town; multitude of chattering strangers. It was no more *my* Rome: the Rome of anybody's fancy, man or boy...and I confess to having gone to bed, that night, in a very indifferent humour, and with a very considerably quenched enthusiasm. (116)

ただし、エリオットもディケンズも翌日には気も晴れて（エリオットとルイスは適当な宿に移り）、観光に精を出すことになる。エリオットは早速遺跡を見に出かけ、想像していたとおりのローマを見出し、さらに、キリスト教時代のローマの代表的な建築、サン・ピエトロ大聖堂やシスティーナ礼拝堂にも感嘆している。ただし、システィーナ礼拝堂についてエリオットが最も気に入ったのはミケランジェロによる天井画であり、“the most wonderful fresco in the world” (345) と絶賛している。このミケランジェロによる天井画と《最後の審判》(*The Last Judgment*, 1536-41) は、ゲーテが賞賛したことでも知られている。

システィーナ礼拝堂を見ずに、およそひとりの人間が何をなし、またなしうるか、きちんと把握することはできないだろう。多くの有能な偉人のことを耳にし、書物で読むが、ここではそれが生き生きと頭上にひろがり、眼の前にある。(ゲーテ下 89-90)

エリオットはサン・ピエトロ大聖堂のイルミネーションについても、復活祭の時期に合わせてローマに来た甲斐があった、と書いている。

We should have regretted entirely our efforts to get to Rome during the Holy Week, instead of making Florence our first resting-place, if we had not had the compensation for wearisome empty ceremonies and closed museums, in the wonderful spectacle of the illumination of St. Peter's. That really is a thing so wondrous, so magically beautiful, that one can't find in one's heart to say, it is not worth doing. I remember well the first glimpse we had, as we drove out towards it, of the outline of the dome like a new constellation on the black sky. I thought *that* was the final illumination, and was regretting our tardy arrival from the detour we had to make, when, as our carriage stopped in front of the Cathedral, the great bell sounded and in an instant the grand illumination flashed out and turned the outline of stars into a palace of gold. Venus looked on palely. (“Recollections” 345)

“wonderous”, “magically beautiful” という形容詞を連ね、最大限の賛辞を送っている。このイルミネーションにはディケンズも感激したと旅行記に書いている。しかしながら、ディケンズが数ページを費やしているサン・ピエトロ大聖堂での復活祭のミサの様子については、「イタリアの思い出」には記述がない。ただひとつ “wearisome empty ceremonies” ということばで、おそらく復活祭のミサを含む一連の行事を片づけている。ディケンズも、サン・ピエトロ大聖堂のクリスマスのミサに行ったトロロープも、大仰で空疎なミサに不満を述べ、ローマ・カトリック批判を展開している。さらに、両者ともそこへ集まってくる旅行者、特に英国人旅行者のマナーの悪さにも苦言を呈している。他方エリオットは、つまらない復活祭の行事と、聖週間に休館してしまう美術館を同列に並べて残念であると述べ、イルミネーションがその埋め合わせをしてくれなければこの時期にローマに来たことを後悔したであろうと記している。こちらの方が痛烈なカトリック批判であるようにも感じられる。

3ヶ月のイタリア旅行のうち1ヶ月を当てたローマは、第一印象こそ悪かったものの、エリオットの知的好奇心を満足させた。ローマに関する最後の記述は、ローマについてはとてもこの短い旅行記には書き尽くせない、というものだった (“Recollections” 349)。

エリオットはローマを発つとナポリへ向かった。1860年になってもまだローマからナポリへは馬車で行くほかなく、多くの旅行者が南イタリアの道路事情の悪さを指摘しているのだが、「イタリアの思い出」にはこの間の移動については天気の記事のみで、ずっと雨が降っていたと書かれているだけである。しかし、ナポリのホテルに着くや否や天気が回復し、絵で見たとおりの景色を見て感激することとなる (349)。ナポリの景色の美しさはどの旅行記でも絶賛されており、北国から訪れた旅行者にとってはまさに別世界のようなのであつたのだろう。ゲーテはその感激を次のように伝えている。

澄み渡った明るい大気のなかをナポリへ近づいていくと、別の国にきたような気がした。建物の平たい屋根は土地柄のちがいをうかがわせたが、あまり住み心地はよくないかもしれない。みな街路に出て、日が照っているかぎり日向ぼっこをしている。ナポリ人は、自分たちのところは天国、北方の国々はたいそうみじめなところだと思っている。(上 365)

この引用にはナポリの人々の様子も描かれている。実はナポリの景色の美しさを描くとき、多くの旅行者は、それとは対照をなす庶民の暮らしの貧しさ、汚さにも目を向けずにはいられなかったようで、トロロープもディケンズもこの対照を描き出している。ナポリに1ヶ月 (1787年2月25日～3月29日) 滞在したゲーテは、庶民の暮らしをつぶさに観察し、家の中まで見せてもらっている。<sup>7</sup> 社会問題を小説の主題として扱ってきたトロロープとディケンズ、研究者気質のゲーテ、とそれぞれの作家の特徴が各々の旅行記にはよく表れている。

一方、エリオットはナポリの庶民についてはまったく触れていない。庶民の暮らしのみならず、ナポ

<sup>7</sup> 入ってみると意外にも家具調度類はきちんとしており、伝統的なものを手入れして使い続けていた、とある (ゲーテ 上 394-5)。

りでは芸術作品にもあまり言及されていない。ゲーテは「ローマにいと学びたくなるが、ここではひたすら生を謳歌したくなる」と『イタリア紀行』に書いているが (上 413), エリオットも、見るべきものの多かったローマの後では自然を楽しみたい、と書簡で述べている (*Letters* 3: 292)。実際には、ナポリ滞在の後半の1週間は近郊の町を訪れ、特にポンペイでは博物館で強い印象を受けており、学ばなかったわけではないようだ。

ナポリから馬車で出かけたパエストウムは、マレーの『ハンドブック』でもぜひ訪れるべき興味深い場所とされていた (267)。古代ギリシャ、ローマ時代の遺跡が残り、現在ではユネスコの世界遺産にも登録されている。ここにはヴェスタ神殿、ネプチューン神殿、バジリカの三建造物があり、その中でも最も古いものがネプチューン神殿である。エリオットはヴェスタ神殿にはがっかりしているが、ネプチューン神殿には魅了され、“the finest thing, I verily believe, that we had yet seen in Italy” (“Recollections” 352) と絶賛している。また、この遺跡については立地も印象に残ったようである。

It stands on the rich plain, covered with long grass and flowers, in sight of the sea on one hand, and the sublime blue mountains on the other. Many plants caress the ruins:—the acanthus is there, and I saw it in green life for the first time; but the majority of the plants on the floor, or bossing the architrave are familiar to me as home flowers—purple mallows, snap-dragons, pink hawkweed, etc. On our way back we saw a herd of buffaloes clustered near a pond, and one of them was rolling himself in the water like a gentleman enjoying his bath. (352-3)

このようにエリオットに感銘を与えたパエストウムの遺跡だが、トロロープは訪れていない。ディケンズは“Turning away to Pæstum yonder, to see the awful structures built, the least aged of them, hundreds of years before the birth of Christ, and standing yet, erect in lonely majesty, upon the wild, malaria-blighted plain” (171) と書いているだけで、それ以上は触れていない。ゲーテの『イタリア紀行』にも記載はない。しかしながら、サミュエル・ロジャーズの詩集『イタリア』にはパエストウムの詩が含まれており、ターナーによる神殿の銅版画も掲載されている (Rogers 207-11)。<sup>8</sup>

エリオットの記述とロジャーズの詩を比べてみると、特にその神殿の立地を描く部分に共通するものが見られる。海と山を背景に、その間に挟まるように立っている遺跡群、周囲は青々とした草が茂る平地で、バッファローが草を食んでいる。近づくとも古代の神殿には植物のつるが絡まり、時の流れを感じさせる、など。もちろん、これらはどの旅行者にも目にも映る光景であり、また草原を彩る植物についてはマレーの『ハンドブック』にも少しばかり記載はあるのだが、それでもロジャーズの詩の響きがエリオットの描写には感じられる。

ロジャーズの詩集『イタリア』は1822年に初版が出版され、その後改訂版や続編がいくつか出され

<sup>8</sup> ただし、この銅版画は本論で指摘したロジャーズの詩句とエリオットの描写の類似を裏付けるものではない。

たが、なかなか注目されることがなかった。しかし、ターナーをはじめとする画家の協力を得て、風景や人物の銅版画を挿絵としてふんだんに掲載した版が1830年に出版されるとたちまち大評判となり、1832年5月までには7000部ほどが売れた。誰もが知る詩集となり、その後二世代にわたってイタリアへ旅行する人へのプレゼントとしても重宝されたという(Hale 111)。この詩集はジョン・ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)がターナーの絵を知るきっかけとなったことでも知られており、エリオットの目に触れる機会もあったであろう。

ナポリの次にエリオットとルイスが向かったのはフィレンツェである。フィレンツェには2週間滞在し、エリオットは再び「学び」に立ち戻り、熱心に建築と絵画、彫刻を見て回った。ここでは次の長編小説のヒントを得たことも知られている。もともとフィレンツェを舞台にした歴史小説を提案したのはルイスであった。

Monday 21st May. This morning while reading about Savonarola it occurred to me that his life and times afford fine material for an historical romance. Polly at once caught at the idea with enthusiasm. It is a subject which will fall in with much of her studies and sympathies; and it will give fresh interest to our stay in Florence. (*Letters* 3: 295)

これはイタリア旅行中にルイスがつけていた日記からの引用である。Polly、すなわちエリオットはその提案にすぐに飛びついたのだった。<sup>9</sup>エリオット自身は1860年5月27日付で出版者メイジャー・ウィリアム・ブラックウッド(Major William Blackwood, 1810-1861)に宛てた手紙で新しい小説の企画を打ち明けている。

There has been a crescendo of enjoyment in our travels, for Florence, from its relation to the history of modern art, has roused a keener interest in us even than Rome, and has stimulated me to entertain rather an ambitious project, which I mean to be a secret from every one but you and Mr. John Blackwood. (*Letters* 3: 300)

計画に夢中になったエリオットであったが、2週間の滞在では調査をするにも限界があった。結局、この翌年、再びエリオットはルイスとフィレンツェを訪れ、1ヶ月かけて小説『ロモラ』(*Romola*, 1862-63)執筆のための準備をすることになる。

1860年のイタリア旅行の最後のハイライトはヴェネツィアであった。イタリアを訪れたどの旅行者も魅了したこの町には、エリオットも魅せられた。

---

<sup>9</sup> ジョージ・エリオットの本名 Mary の愛称が Polly.

Soon we were in a gondola on the Grand Canal, looking out at the moonlit buildings and water. What stillness! What beauty! Looking out from the high window of our hotel on the Grand Canal, I felt that it was a pity to go to bed: Venice was more beautiful than romances had feigned.

And that was the impression that remained and even deepened during our stay of eight days. That quiet, which seems the deeper because one hears the delicious dip of the oar (when not disturbed by clamorous church bells), leaves the eye in full liberty and strength to take in the exhaustless loveliness of colour and form. (“Recollections” 362)

到着した夜、ホテルに向かうゴンドラから見た景色、その後ホテルから見た景色は信じられないほど美しかったとある。さらに彼女がヴェネツィアに惹きつけられたのはその静けさだった。この引用には8日間滞在したとあるが、当初の予定では3、4日のはずであった (*Letters* 3: 307)。それだけヴェネツィアが気に入ったのである。

到着翌朝はまず “a focus of architectural wonders” であるサン・マルコ広場に赴く。エリオットはその中でもドゥカーレ宮殿が全ての建造物の頂点 (“crown”) と感じており、ラスキンがドゥカーレ宮殿を世界で最も完璧な二つの建物のうちのひとつだと評したことを知り、嬉しく思った (“Recollections” 362) と記している。

その後、ドゥカーレ宮殿とその他サン・マルコ広場を囲んで建つ建物の外観についての描写があり、さらに宮殿内部へと入り、大広間の天井画<sup>10</sup>に感心している。宮殿を出て次はサン・マルコ大聖堂に向かうのだが、その途中に溜息橋を渡り、牢獄を見学する。エリオットは簡潔な文で、豪華絢爛たる宮殿と暗く湿った牢獄を対照し、光と空気を自由に味わえる生活のありがたみを感じた様子を記している。

From the splendours of the palace we crossed the bridge of Sighs to the Prisons and saw the horrible dark damp cells that would make the saddest life in the free light and air seem bright and desirable. (“Recollections” 363)

ところで、このような暗い過去に惹きつけられずにはいられないのがディケンズである。トロロープも牢獄については詳細に記載しており、過去の蛮行を糾弾しているが、ディケンズの『イタリア紀行』のヴェネツィアはすでに述べたとおり、その全体が過去と現在、夢と現が入り混じるような幻想的な描写となっており、トロロープの社会批判とはまったく異なる方法でその暗部を伝えている。

...torch in hand, I descended from the cheerful day into two ranges, one below another, of dismal, awful, horrible stone cells. They were quite dark. Each had a loop-hole in its massive wall, where,

<sup>10</sup> パオロ・ヴェロネーゼ (Paolo Veronese, 1528-1588) の《ヴェネツィアの凱旋》(*The Apotheosis of Venice*, c. 1585).

in the old time, every day, a torch was placed—I dreamed—to light the prisoner within, for half a [sic.] hour. The captives, by the glimmering of these brief rays, had scratched and cut inscriptions in the blackened vaults. I saw them. For their labour with a rusty nail's point, had outlived their agony and them, through many generations. (81)

そこでは夢は、悪夢のような過去を目のあたりにすることであり、陽光眩しい現実から暗い夢の中に落ちてゆくように、ディケンズはかつての牢獄を見学するのである。ここでも作家の気質の違いは顕著である。

エリオットはヴェネツィアでも精力的に絵画を見ており、特に気に入ったサンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ聖堂にあるティツィアーノ (Titian, 1488/90-1576) の《殉教者ペテロの死》(*The Death of St. Peter Martyr*, 1528-30)<sup>11</sup> は、1週間の滞在中5回も見に訪れた。そのほかにもティツィアーノの《聖母昇天》(*The Assumption of the Virgin*, 1516-18) を見るため、アカデミア美術館を何度も訪れたことが記されている。ティツィアーノの絵はロンドンのナショナル・ギャラリーにも多数収められていることから、英国で特に好まれた画家であったことがわかる。エリオットも明らかにイタリア訪問以前から彼の絵に親しんでいたであろう。

## V. おわりに

以上、さまざまな文献と照らし合わせながら、エリオットの旅行記を検証してきた。「イタリアの思い出」はその短さゆえに内容は厳選され、旅の後も強く印象に残っていること、記憶にとどめておきたいことが記されていると考えられる。

出版された他の作家による旅行記も、イタリア旅行が特権階級のものだけでなく、旅行記、ガイドブックが数多く出版されている時代に、先行する旅行記とは異なる独自の色を出そうとしていたが、出版をめざしていたわけではない「イタリアの思い出」にもエリオットの色が感じられる。「イタリアの思い出」冒頭にあったように、彼女の旅は人生の幅を広げ、教養を深めることが目的であった。3ヶ月の旅はそれまで自分の目で確かめたいと思っていたものを確かめる旅であり、また、その後の人生を豊かにする、とりわけ作家としての人生の幅を広げる旅でもあった。彼女が敬愛する作家ゲーテはローマ滞在中、次のように書いている。

ローマの古代遺物も楽しめるようになってきた。歴史、碑銘、貨幣など、以前は何の興味もなかったものがみな、ひしめき合って迫ってくる。私が博物学で経験したことが、ここでも起こった。すなわち、世界の歴史全体がこの地と結びついていて、私がローマに足を踏み入れたその日が私の第二の

<sup>11</sup> この絵は1867年、保管されていたサンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ聖堂の礼拝堂の火事で焼失した(ヴァザーリ 2: 280)。

誕生日となり、真の再生がはじまったのである。（上 289）

ローマにおいて再生したゲーテと同じように、エリオットにとってもイタリアの旅は新しい生の始まりを告げるものであったようだ。帰国後、友人に当てた手紙には次のように書かれている。

We have had an unspeakably delightful journey—one of those journeys that seem to divide one's life in two by the new ideas they suggest and the new veins of interest they open. (*Letters* 3: 311)<sup>12</sup>

こうしてイタリア旅行は、その後のエリオットの創作活動にとっても大きな糧となり、『ロモラ』、『ミドルマーチ』（*Middlemarch*, 1871-72）においてこのイタリア体験は活かされることになるのである。

#### 引用文献

- Black, Jeremy. *The British and the Grand Tour*. Croom Helm, 1985.
- Buzard, James. *The Beaten Track: European Tourism, Literature, and the Ways to 'Culture' 1800-1918*. Clarendon Press, 1993.
- Dickens, Charles. *Pictures from Italy*. 1846. Penguin, 1998.
- Eliot, George. *George Eliot Letters*. Edited by Gordon S. Haight. Vol. 3, Yale UP, 1954.
- . "Recollections of Italy. 1860." *The Journals of George Eliot*, edited by Margaret Harris and Judith Johnston. Cambridge UP, 1998, pp. 327-68.
- Haight, Gordon S. *George Eliot: A Biography*. Oxford UP, 1968.
- Hale, J. R., editor. *The Italian Journal of Samuel Rogers*. Faber, 1956.
- A Handbook for Travellers in Southern Italy*. 3rd ed. Murray, 1858.  
[https://books.google.co.jp/books?id=kv5WAAAACAAJ&hl=ja&source=gbs\\_navlinks\\_s](https://books.google.co.jp/books?id=kv5WAAAACAAJ&hl=ja&source=gbs_navlinks_s)
- Rogers, Samuel. *Italy, a Poem*. T. Cadel, 1830.  
<https://archive.org/details/italypoem00rogerich/>
- Schaff, Barbara. "John Murray's *Handbooks to Italy*: Making Tourism Literary." *Literary Tourism and Nineteenth-Century Culture*, edited by Nicola J. Watson, Palgrave Macmillan, 2009, pp. 106-118.
- Trollope, [Frances]. *A Visit to Italy*. Bentley, 1842. 2 vols.  
[https://books.google.co.jp/books?id=ehjTAAAAMAAJ&hl=ja&source=gbs\\_navlinks\\_s](https://books.google.co.jp/books?id=ehjTAAAAMAAJ&hl=ja&source=gbs_navlinks_s)  
[https://books.google.co.jp/books?id=QDJqAAAAIAAJ&hl=ja&source=gbs\\_navlinks\\_s](https://books.google.co.jp/books?id=QDJqAAAAIAAJ&hl=ja&source=gbs_navlinks_s)
- ヴァザーリ, ジョルジョ. 『芸術家列伝』平川祐弘・小谷年司訳, 白水社 U ブックス, 2011, 全3巻.
- ゲーテ, [ヨハン・ヴォルフガング・フォン] 『イタリア紀行』鈴木芳子訳, 光文社古典新訳文庫, 2021, 上下巻.

<sup>12</sup> 1860年7月2日付, 作家サラ・ソフィア・ヘネル (Sara Sophia Hennell, 1812-99) に宛てた手紙.